

新説 吉良上野介

榎本捨三

新説 吉良上野介



榎本捨三

新国民出版社

榎本捨三（うめもと すてぞう）

日本大学法学部中退。在学中より戯曲を書く。
1939年渡満。在満中、新聞、雑誌に連載ものを
執筆。1946年帰国。帰国後の主著「女の履歴」
「黒い風の中を」「関東軍終戦始末」「戦争」
上・下「無国籍兵団」「満州」映画原作多数。
日本文芸家協会会員
現住所 〒152 目黒区洗足1-8-8

新説吉良上野介

定価 一〇〇〇円

昭和五十年十一月二十八日初版発行

著者 榎本 捨三

発行者 大江 可之

発行所 新国民出版社

〒一〇四 東京都中央区銀座三十一一九

電話 〇三（五四二）一五一三

振替東京 一七七九一七

©一九七五年

文選植字 第二整版 カバー印刷 富士印刷

本文印刷 内海印刷 製本 黒柳製本

装幀 東 啓三郎

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

目次

● 吉良は討たれず

一の章 討ち損じ赤穂浪士

…… 3

二の章 二度死んだ吉良上野

…… 55

● 吉良生きてあり

…… 89

● 信長若き日の恋

…… 141

● 光秀よなぜ叛く

…… 193

吉良は討たれず



一の章 打ち損じ赤穂浪士

—

深夜よりも厚い暗さのなかを、背をおり曲げ、壁だけを頼りとして、爬虫類のように、這って歩くのである。

吹き抜ける風を心によび、不気味なふるえにとり憑かれていくように、その長い道と、地下の部屋は冷えきっていた。

シッケ臭い匂いが、鼻をついた。もし、少しの光でもあったなら、この灰色のくろずんだ地下道は戦慄をさえよんだであろう。

いつか三人の男たちは曲りくねり、次第に地底深く導かれている地下道を歩く習慣に、さしたる苦しみも感じなくなっていたのであった。ただ、いつまでたっても地上へ出た一瞬の眩惑げんわくになれきることは難かしかった。

地下道のなかでは、張り裂けるかと思うほど眼をみひらいて歩く癖に、大地に近づく薄光を

感ずると、彼らは無意識にかたく眼を閉じ、油断なく構えて地上に近づいてゆく。

何よりもうまい空気の味だけは、胸いっぱい吸い込むのであった。

その高い水々しい匂いは生気をとり戻してくれるのだ。石室のなかにとじこもったままの主人に、何を語りきかせてもこの空気と光の清らかさと美味については伝えなかつたのである。無惨にすぎると思われたからでもあらう。

地底の奥深く、シッケ臭い匂いが濃く、地下室は薄暗かつたのである。壁や襖も、いつのまにやら、ジツトリと水気を含んで、すべてが掩いかぶさってくるような圧迫を感じるのである。

襖などはベツトリと濡れて、上部からいまにもとけ流れる泥土のようにみえた。

外界といっさい遮断されていたこの室では、主人の吉良上野介義央——いや、現在では上野介と呼ぶことが正しいかどうかかわからないが、義央と、その家来たちの三人が、いつも向きあつて言葉を喪^{うしな}つたように、重い沈黙のなかにおちいつていたので。

不思議なことである。

いまは、一七〇三年——つまり、元禄十六年春の季節である。義央は、もうとつくに死んでいる筈だ。昨年元禄十五年の十二月十四日に……。

しるし、生きていたのである。

三人の家来にまもられて地下に生きているのは、まぎれもない吉良上野介の姿であったのだ。あの頃のままの四方よ髪かみの義央であった。不思議な世界の不思議な生物である四人は、何千尋ちよせんという深海の底にへばりついている盲目の魚族のような存在であった。

義央よりいくらか年若い三人さえ、義央と同じく銀のように真白な髪を頭にいただいていた。四人が四人同じような顔である。表情のない不思議な男たちである。

時に言葉を喪い、人生の光とてない。ただあるものは、世評の毀誉褒貶きよほうへんを裏返し、表返えしするのである。それだけが生きてゆくメドである生活を繰り返して来た。なぜ、人はこのようにしてまで生きられるのであろう、生きていたいののであろうか。

自己の立場が悲境におち、世評が冷たくなればなるほど、人は反逆し、あてつけ、抗争し、生き抜いてやろうと、ふてくされるのであるうか。

吉良は一七〇一年（元禄十四年）三月十四日以後、肌近く吹く世間の冷たい風に反発せずにはいられなくなってきた。一躍、日本中に有名となった義央も、つい、その一日前までは、無名一介の老式部長官に過ぎなかったのに。

彼の言いぶんというものは一切封じられてきた。あれ以来、彼の言葉は、この世界では一切通用しなくなったのだ。おそらく、今後、何百年、義央は自己の言いぶんを何ひとつ取り上げ

られない男となるに違いない。

義央が「吉良日記」をかき出したのは、日記にもあるとおり、彼の四十九日からであった。

二

あの日以来、義央は自己をまもるために、武力だけを信じず、いや、武力など頭から信じない義央となっていた。

まず、こころの表裏、策を見抜き、それへの防御をかためるしかたのために、推理と心理学にのみ自己の全力を尽したようにみえる。心をすましてみるなら、幕府の政策の裏も、味方である筈の上杉家の千坂兵部にさえ、恐ろしいおれを葬ろうと欲する奸策が潜んでいることがありとわかるのである。

おれに非はない。

常づね、義央は、その一事だけに心をかたくなに囚われてきたのである。非のないおれが、なぜ、このような不当な取り扱いを受けるのかといらだつ。

いったい幕府や浅野、そしてその報道だけをうのみにしている世間は、当初、事件の真相に對して、少しでも検討や、批判を加えようとしたのであろうか。感情以外に、あの事件を見なおそうとしたものが幾人あるのか。

今日にしてこのようでは、後世、おれの黒白をつけるものは一人もないであろうし、文書という文書は、嚴重な検閲をとおして、幕府の御用学者と、便乗者によって、完璧にまでデッチ上げられてゆくに違いない。

『歴史』とは、このように不確実で、虚偽、虚構に満ち、飾られたものなのか。

吉良は、自己に非なしという弁護から、「吉良日記」の一頁をはじめている。仮りに非があるとしても、それは武力に訴えるほどの非ではさらになく、良識あるものなら当然、浅野はおれのやや強い言葉に対して、まずあの日の繁忙さ、またあの日の重要性について、自ら反省しなければならぬ筈であったのだ。

義央には、あの時なぜ、あのように浅野が激昂し、刀まで抜いて斬りかかってきたのか、未だに理解に苦しむのであった。慣例によれば、柳營で抜刀したものは、本人はもちろんのこと、家はとりつぶされ、一族離散が不文律となっていたのである。

その掟は、武士であるなら、少年といえども、知らぬ筈はない。知っていて、それを犯すというのは、よくよくのことか、狂気沙汰である。狂人とも思われない浅野が、あのようなことをしかけた、よくよくの原因というものが、義央には思い当たらぬのであった。

正直、思い当たらぬのである。したがって、義央は世にもおそるべき災厄さいやくと思うのだ。災厄と諦めるにはあまりに大きい未来にまで尾をひく災厄であると思う。

年齢の相違――

そこに悲劇の一素因が潜んでいたのだ。そう吉良は近頃思うのであった。

吉良はいまとなって考えるのである。

彼らは、一年の間に、数えるほどしか公式の儀式に列しない。まして、その公式の儀式の委員たり、役員たるものは一生を通じて当たるものもあれば、生涯さような役割を受持つ機会をもたぬものの方が多いのだ。

さて、そのような役割を振り当てられた大名どもは、一切が他力本願であり、何の予備知識もなく前例もしらない。知ろうともしない。

おれは、こういうてあい、ひとつひとつ手をとって教えなければならず、研究心などさらさらなく、前例ひとつ調べようともしない。これらのわがまま者に対して、ちょっとした過失があっても、その責任は、究極するところ、おれにかかってくる。おれはもう老年であり、毎年同じような事項を教えるのに、ほとほと嫌気がさしてきていた。

豊事件とか、襖事件とか世間ではいろいろおれが意識的にやったように取沙汰しているが、毎年のごとであり、前例は、ちょっと使でも走らせればすぐわかることだ。

いちいち教授を仰ぐ必要のないことであり、前年の大名にでも問い合わせたなら、すぐ知る

ことの出来ることでもある。それが不安で自分を師と仰ぐなら、仰ぐ方法というものがあるはずだと、義央は思う。

あの時は、慌しくいそがしかった。勅使の到着間際で、ごったがえしている最中、当然、前もって知っていなければならぬ簡単な事項を、それこそ、誰でも知り抜いているようなことを、さし迫って眉をつりあげて質問してくる。

そんなうかつなことで……。

おれはただ、そう呟いたに過ぎない。おれは心からそう思ったからだ。おれでなくとも、それぐらいのことは言うに違いない。その話の最中、浅野と事務打ち合わせのため、梶川がきて、何か重要そうなことを話し出したので、いや、おれがきいておこう、後刻、間違っただけいなから——

その時だった。痛高く叫んだ言葉が背の方できこえたと思うと、熱鉄を浴びたような衝撃を背と肩のあたりに感じたのであった。

おれには、まったく意外な暴力沙汰であった。

こんな乱暴な話があるのか。こんな暴行が公の場所でゆるされようか。事件はただ、それだけのことである。事件は後にも先もない事実、それだけのことであった。

おれはほんとに信じたのだ。間違っただけならぬ。つい、二、三十分後に自分の坐る位置さ

え、いちいち指示されなければわからないような迂闊な浅野だけに、打ち合わせ事項を受けさせて、それも重要そうな事柄に思えたので、万一の事があったなら、指導役の責任になる。不始末があつてはならないと思つて、自分がきいておこうといつたのに過ぎないのだ。

むしろこれは親切である。ここにも年齢の相違がみられるのであろうか。ただ、それだけの軽い気持が、人を斬るほど重大な言葉かと、義央はいまでも理解に苦しんでいるのである。

原因におのれの非を発見できぬ以上、義央は加害者への世間の同情を憎まずにはいられないのである。

いまとなれば人は情実と呼び、個人感情というであろう。しかし幕府のあの日、事件直後の処置だけは立派であつたと思ふ。おれに寛大であつたのは当然の処置に過ぎないではないか。

いや、今日にして思えば、その処置の奥深く、かくも陰險な策謀への発展があらうとは、おれもあの時は考えもおよばなかつたが――。

当然の、公平無私の判定と、おれは満足したのである。

事は平凡な一方的喧嘩にすぎなかつた。幕府として、もっとも大切な式日に、上長である式部長官を殺そうとしたのは、浅野の方である。仕かけたのは彼であり、おれの方ではない。

彼自身の行動の責を負つて処決されたのであつて、彼自身が浅野家を滅亡させたのではなかつたのか。

しかし、簡単な事件は、簡単には終わらなかつた。そこに政治があり、謀略があり、ついに浅野方の復讐事件にまで発展していったのである。

すべて、このように仕向けられたのは他ならぬ柳沢吉保に外ならない。

浅野方のものが復讐をするという理由は、全然成立しない。それはおれに對するよりも幕府への反逆ではないのか。おれこそ、浅野を憎みたい。浅野家が嚴たる法律によつて処分されてみれば、一切はそれで終わつてよい筈のものである。

おれは六十になる。相手は美男の三十という年齢、その若いさむらいが、桜の花の散る春の宵に、一片の歌を残して、無慘に、腹を切らされたのである。その日、それも慣例を破つて庭先で――。

世間の浮薄な同情はもちろん、おれの上になぞなく、大道具、小道具完璧のそのうえ散る花弁や、夕月の庭、灯の光と影に眩惑げんわくされてしまうのは当然のことであろう。この無言の同情や批判が、あらゆる掟おきてや法律や、人の思考や良識まで歪め、あるいはそらし、意外な方向へねじまげてゆく。

当然、冷静に批判されねばならない根本原因などは、いつか放置されて、是非が感情の波だけに乘つて左右されゆれ動いてゆく。これを宿命と呼ぶのであろうか。これさえ、宿命と諦めねばならないのか。

と、義央は考えてみたりする。

いやいや、宿命などではない。原因は別として、そこに恐ろしい政治の陥穽かたまりがあり、御都合主義がある。

と、義央は記している。

いずれにもせよ、おれと浅野とが、あの日ひとつの役割によって相対した刹那に、まず、政府は、いや、柳沢は大きい利用価値の根を発見したにちがいない。

柳沢はそれを承知で、おれと浅野とを組み合わせたのかもしれない。浅野に思慮分別がなく、短慮は有名であり、おれの性格も知り抜いている幕府要人たちであった。

性格と年齢から起こる悲劇というものを巧みに利用すべく、何事か起こるにちがいない——と、当初から計画に入れての人選でもあったのであろうか。これは思い過ぎであらうか。

すくなくとも事件後は、まことに巧みにこれを政治的に利用している。次々に起こってきた付随的な事柄が、政治の根本的方針へ指向されていたのだ。いや、政治が次々に事件の起こるように組みあげられていた。

世間によるおれへの非難にもかかわらず、幕府はよく感情をすてて公平に裁いた。人は不当にあたたかかったと非難するほどに——。

なぜだったのか？ おれ自身やっと今日になって、その策がわかりかけてきた。おれは幕府